

アジャイル開発技法の評価に関する研究

ーアジャイルプロジェクト関係者間における 認識ズレの計測手法ー

アブストラクト

1. 背景と問題認識

「アジャイル」は世界規模でソフトウェア開発の主流となりつつある。日本においてもアジャイルに関するコミュニティやワークショップが多数設立・開催され、アジャイル開発が注目されている。その手法は派生した手法を含めると、全てを把握することが困難なほど広がりを見せている。また、アジャイルの活用により様々な効果が得られると期待も大きい状況である。

一般的にアジャイルではウォーターフォール以上に、関係者間で認識合わせが重要であることが経験的に知られている。その一方で、関係者間の認識ズレを簡易的に把握する手法は確立していない。

2. 研究の目的と主張

本研究は、アジャイルプロジェクト関係者間で発生する認識ズレの計測を目的とする。共通のアンケート項目を用いてプロジェクトへの期待や価値の優先順位に対する回答を得て、プロジェクト毎に結果を整理し差分を分析することで、用いるアジャイル手法やプロジェクトの規模・業種問わず、あるプロジェクトにおける関係者間の認識ズレが計測可能であるというのが本研究の主張である。

3. 研究アプローチ

アジャイルを活用する様々な業種・規模のプロジェクトを対象とし、そのプロジェクト関係者に対してアジャイルの手法や期待に関する共通の設問から成るアンケートを実施する。標準偏差などの統計的な手法に基づいた認識ズレの指標を定義し、アンケートの回答結果をプロジェクト毎に集計して認識ズレを計測する。そしてアンケートから計測した認識ズレが、実際の現場で発生しているプロジェクト関係者間の認識ズレの大きさと乖離のない結果であるかをインタビュー結果と照らし合わせることで、アンケート項目や認識ズレの指標の有効性を検証する。

4. 結論

規模や業種の異なる5プロジェクト、計38名に対してアンケートを実施し、プロジェクト関係者間の認識ズレを計測した。あるプロジェクトは大半の大問で平均値を下回った一方、別のプロジェクトは大半の大問で平均値を上回る結果となり、プロジェクトごとの認識ズレの傾向が見て取れる結果となった。さらに、両プロジェクトの担当者へインタビューを実施した。認識ズレの小さいプロジェクトでは、認識ズレを無くすための体制構築やプラクティスが実施され、認識ズレが起こりづらい状態となっており、一方でズレの大きいプロジェクトではそのような取り組みは少なく、現場としても混乱が大きかったことが分かった。これはアンケートから計測した認識ズレの指標と一致したため、プロジェクトの特性を問わず共通的なアンケート項目や指標によって認識ズレの大きさを計測可能であったといえる。